

今年度の大会テーマからすれば、本報告で求められているのは、我々の対象地である宮城県鹿島台町の山船越における“生活破壊”

生産組織と“生活破壊”

東北大学大学院 谷田部 武男

の実情ということであろうが、高度成長期の農民の生活の変化を意義的に“破壊”としてしまうことには疑問を感じる。“生活破壊”という言葉からすぐさま思い浮かべられるのは、公害、過疎、集落移転などだが、山船越の場合は、それらのいずれにも現在のところ該当しない。“破壊”という言葉から連想される生命再生産の危機的状況といったものはあてはまらない。山船越の“生活破壊”を考えてみると、公害等のドラスティックな状況ではなく、表面的には平穏な農村においてなおかつ進行している“生活破壊”と何かということから検討していかなければならないであろう。

一般的に生活苦ということであれば、封建時代はもちろんのこと、明治・大正・昭和と農民の生活は一貫して苦しかったはずである。単純に歴史的な比較を考えれば、むしろ、生活苦は軽減して、生活は上昇したということになろう。とくに、戦前小作で農地解放で自作となつた農民を考えてみれば、このことは実感としてあてはまる。高度成長期に、三チャン農業とか出稼ぎによる家族解体状況などが出て来て、これが“生活破壊”という概念でとらえられている。農業解体といわれるよう、産業としての農業がためにされつつあるところに根本問題があるにしても、農民の側では、農業で生計を維持できないかわりに、兼業＝農外就労の増大という形で所得を補なつている。いや今日では補なうどころかむしろ農業の方が「兼業」と化すという状況すら出て来た。所得という点で見る限り、農業解体は、個々の農家の世帯レベルでの“生活破壊”には直結しなかつた。世帯単位に見た場合、農外収入による所得増は、農民自身の受

け取り方としては、生活の上昇であつたかもしだい。これを一義的に生活の「破壊」と呼ぶことが適切かどうかは論議されてしかるべきであろう。高度成長期の「生活破壊」という場合の問題関心は、農業解体が農民の生活にどのような影響を与えたかというところにあると理解するので、本報告では、農外就労の増大とともになう農民の就業構造の変化が何をもたらしたかというところに焦点をしぼって、山船越の「生活破壊」の事例報告とした。

山船越の調査にあたつては、まず第一に、各地で集団栽培等の崩壊が続いたにもかかわらず、山船越において水稻と養鶏と両部門の生産組織が十年以上にわたつて存続している、秘密は何かという関心があつた。まぎりなりにも共同化が成功した事例として、その解明は大きな意義があろう。

第二には、最近の農民層分解論の動向に触発された関心があつた。

誤解をおそれず要約してしまえば、かつての中農標準化か両極分解かという分解論の「形態論」から、梶井功・伊藤喜雄氏らの生産力視点からの分解論をへて、現在では分解のメカニズム、分解のプロセスそのものの分析を重視する分解の「構造論」へと流れが変わつてきている（最近の業績をあげれば、田代洋一・宇野忠義・宇佐美繁三氏の研究は、文字通り「農民層分解の構造—戦後現段階」である）。抽象的論議から具体的分析へという流れ、古典的分解論を所与の前提とするのではなく、むしろ実証分析そのものから理論構成が定まつて来るという動き、これがこと数年の分解論の動向だつたといえよう。しかし、分解の「構造論」をさらに具体化して、それぞれの

局面で農民はいかなる過程をへて分解していくのかという、いわば分解論が必要になつてくるのではないか、というのが我々の考である。たとえば、農業従事者が農外産業に就労していく場合の労働意識のあり方、一般的にいえば、社会経済的諸条件に制約された「存在の変化」のもたらす「意識の変化」、そしてそれが逆に「存在の変化」を方向づけて行くという過程をとらえるところで進まなければ分解論の具體化は達成されないであろう。山船越の水稻生産協業組合は、今年度から農外就労をやめてタバコ栽培にきりかえ、水稻とタバコで労働力の完全燃焼をはかるという方向転換をしているのであるが、この変更については、農外労働の与えた影響、しかも、とくに農民の意識の側面に与えた影響ということを抜きにして語れないものである。

なお、報告では、以上の問題関心について、山船越の概況とそこにおける生産組織の特徴について述べたが、紙幅の関係で省略したので、佐藤勉・鹿子木月子・谷田武男「農業構造改善事業と生産組織の形成—宮城県鹿島台町船越地区の事例研究」（「東北大学日本文化研究所研究報告」別巻第一三集）を御参照願えれば幸甚である。ここでは、生産組織と農外就労の状況についてみて行くこととする。また、報告では資料を用いたが、それも省いた。討論中、省略した部分にかかる事柄が出てくるが、その点御了解頂きたい。

山船越水稻生産協業組合（以下水稻協業と略称）にとつても、農外就労は大きな意味を持っていた。水稻単作の生産組織にとつて余

剩労働の完全燃焼ということ、地代配分で不利な下層農家にとつて直接の収入増につながるということ、そして、第三に、財布持ちでない若い世代の組合員にとつては、農外収入が唯一の自由になる現金収入であることなどから、農外収入は、単に量的な意義だけなく、質的にも比重は大きかつた。そのため、水稻經營では形成時

(昭和四〇年)から農外就労には独特の努力を払ってきた。その特徴をあげると、まず第一に、農外就労は組合員個人が勝手にやるものではなく、組合の仕事として、組合を通して行なわれる。組織のメリット(バラバラではなく、五人、十人とまとまつた労働力を提供できる)を生かして、単なる建設業関係の日雇仕事ではなく、たとえば、土木工事そのものを下請けして、日雇よりも有利な資金を稼ぐといった努力もしてきた。組合全体が、稻作の省力化を進めて、兼業に力を入れた型である。第二に、農外収入の配分の仕方に特徴がある。農外就労は農作業従事と同等の位置づけが与えられ、組合出役労賃を農外就労の賃金が上回る場合はその分をアールし、これを組合運営費に充当するという方法をとっている。だから、農外に出ても、農作業をしても一日当りの労賃は同じである。このような農外就労のやり方と収入の配分は、できるだけ組合員の収入の平等化をはかり、組合の分裂を避けるための方策である。田んぼに残る者が損をするという問題を、自らあみだした独自の方法で解決しているわけである。

このような農外就労をやめて水稻協業が今年度から五反歩のタバコ栽培に踏み切つたことについては、不況の影響とか、タバコによ

る経済的メリットということでは説明できない。今年のタバコ耕作面積では昨年度までの農外収入をカバーできぬし、組合では数年後には二町程度に拡大したいという計画を持っているが、二町やつたとしてもほぼトントンである。

むしろ所得の面ではマイナスになることを覚悟してタバコに転換した要因としては、農外労働の与える農業労働への悪影響ということが大きい。まず、農外就労が恒常化していくと、命令されて決まつた仕事だけをするということに慣れてしまい、農業生産にとって重要な自主的判断能力を失っていくというデメリットが出てくる。とくに若い世代に顕著であるといふ指摘が年輩のリーダー層からなされている。第二に、より重要な問題としては、水稻協業内の世代交代を考えた場合、若い世代は農外従事者数が多く、肥培管理などの農業技術の伝達がスムースに進まないという問題がある。若い世代が農外就労を希望し、年輩者が田を守るということになると、若い者は機械の運転は得意だが、水かけの仕事はいつまでも覚えないというような問題が出てくるのである。また、日数の多少にかかわらず、農外就労に目が向くと、農業の労働意欲を失わないまでも、田仕事の手を抜きがちになるという悪影響が年輩リーダー層の心配の種になつてている。つまり、若い後継者の数はそろつても、農業労働力の質というものを考えてみると、決して世代交代になつていな。単純化していえば、若い世代は機械のオペレーターと農外就労、水かけその他の肥培管理は年輩者任せというパターンが固定化しつつある。農業生産技術の世代間の伝達がうまく行かないということ

が、水稻協業にとつて大きな問題となつてきたわけである。

そこで、組合では当面の収入減を覚悟の上で農外就労をやめてタバコ栽培に踏みきつた。収入減を考慮した上で、なおかつこのような方針決定が可能だつた背景には、水稻協業の稻作収入が安定しているという事情があることはもちろんある。もうひとつ、水稻協業では、今年、組合の任務分担（トラクター係、栽培係等）の全面的な変更をした。全員の配置替というのは組合結成以来はじめてのことである。任務分担の固定化による専門閉鎖（たがいに相手の仕事内容に理解がおよばず意志疎通がうまくいかないという問題も出てきた）の打開というのがそのねらいであるが、実は、これもタバコ栽培と同じく、後継者育成という意図が大きかつた。若い世代に稻作の一部だけではなく、できるだけ全体を体得させ、頭数だけなく労働力の質の点でも充実した世代交代をしたいという努力のあらわれなのである。

当然のことながら、農外に出るのをやめ、タバコ耕作に転換するという方針については、若い世代に不満があつた。表面的には若い者にとって自由になる現金収入の道がとざされるという問題なのが、実は、このことは自家労働評価という問題に關係してくる。水稻協業の労働評価は、老若の差なく一日の出役労賃は一律平等という方法をとつてゐる。山船越の場合、二十代の後継者についていえば、個別經營農家では最上層の一戸を除いて、あとは全部賃労働者化している。それもほとんど恒常的勤務である。水稻協業の若い世代は、このようなサラリーマン化した同年代の者と自分を比較せざ

るを得ない。そこで、組合出役の労働評価についても不満が出でるわけである。自分は働くだけ働いても、それに見合つた収入があるかといえば、財布は父親が握つていてから小遣にも不自由する。農外収入については自分の自由になるので農外就労に走る。簡単に言えばそのようになつてゐる。言つてみれば、組合出役の労働評価に対する潜在的な不満のはけ口が農外就労だつた。水稻協業では、農外就労によつてほんとうの世代交代が進まないという問題があるにもかかわらず、若い世代は農外就労を志向するという矛盾をかかえている。ひとつの打開策として、農外就業打ち切りとタバコ栽培開始、そして任務分担の編成替という方策をとり、若い世代の目を農業そのものに向けようとしているのであるが、問題は残つてゐる。本年度の共通課題の“生活破壊”ということにおいては、このへんのところがかかわつて来るであろう。